

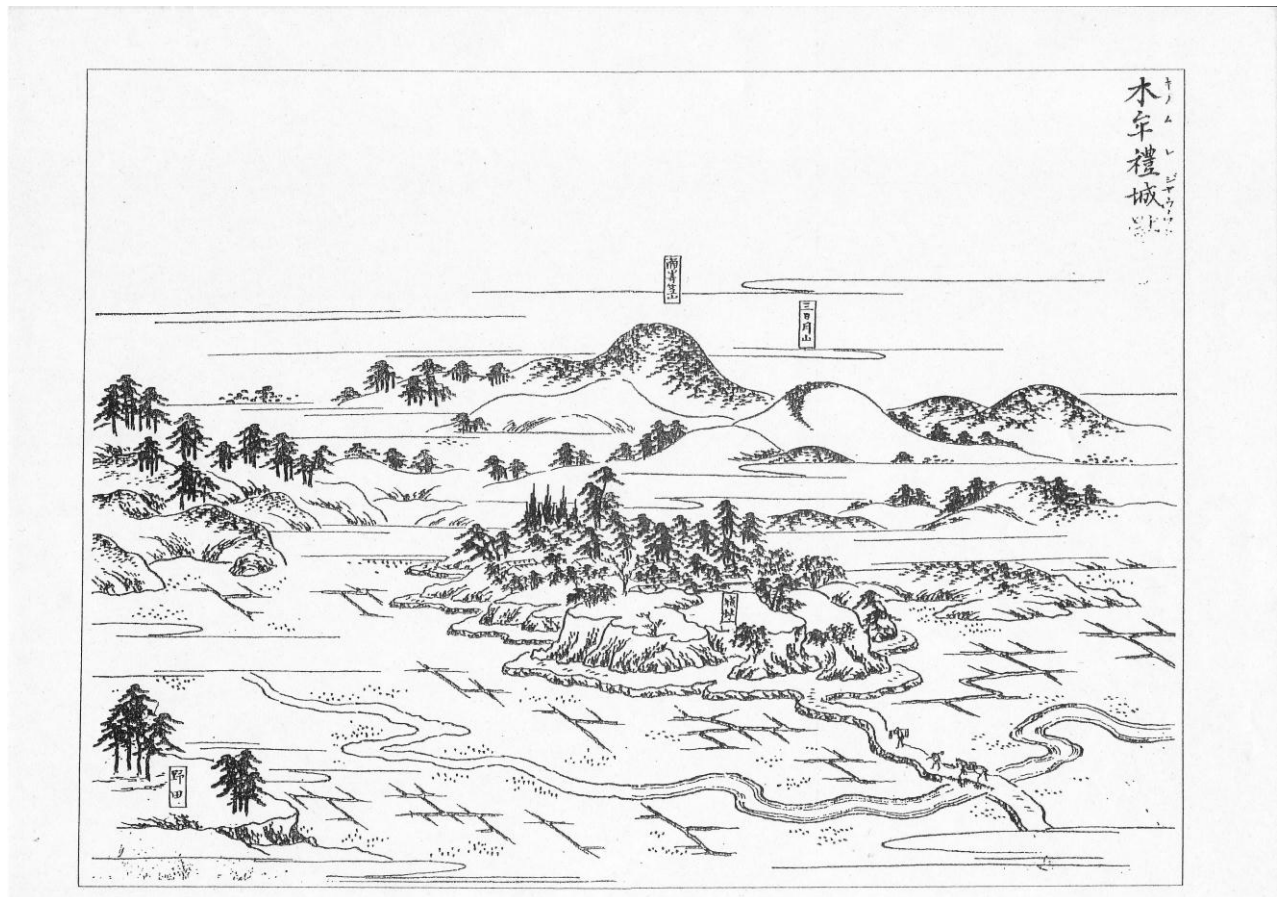
中世島津家の時代

史跡めぐり歩こう大会

《とき》平成26年5月18日（日）午前9時～12時00分

《ところ》出水市野田支所：出水市野田町下名 7035 番地（発着場所）

《コース》① 感応寺 ② 五廟社 ③ 俊寛僧都碑 ④ 中郡の田の神 ⑤ 若宮神社
⑥ 木牟礼城跡 ⑦ 中郡遺跡群（屋地館跡） ⑧ 山内寺跡



絵：「木牟礼城跡」（薩藩名勝志より）

中世島津家の時代 史跡めぐり歩こう大会マップ



中世島津家の時代（初代から5代まで）

初代 ただひさ 忠久

島津家初代忠久が記録に登場するのは『山槐記』さんかいき 治承3年（1179）2月8日条に春日祭使の行列に参加した侍の一人として登場します。忠久は源頼朝の子という説もありますが、摂関家の政所に仕えていたこれむね惟宗氏であるとされており、母が頼朝の乳母であった比企尼の娘とされており、この縁で頼朝に仕えたものとみられています。



平家が壇ノ浦の戦いで滅んだ文治元年（1185）に源頼朝から島津しまづのしょうげ 荘下司職すしきに任命されました。その後、建久8年（1197）に薩摩・大隅の守護職に任命されると、家臣の本田貞親さだちかを木牟礼城に派遣して領国の運営にあたらせました。

忠久は、建仁3年（1203）の比企能員ひきよしかずの変に加わったとして、薩摩・大隅・日向の守護・地頭職を没収されましたが、建保元年（1213）に和田合戦等の功績により薩摩国の守護・地頭職のみ再任されました。

忠久は、薩摩国の外に信濃国塩田荘の地頭や豊後の守護職にも任命され、鎌倉に在住していましたが、島津荘を本拠地とし、島津氏を名乗るようになりました。あずまかがみ吾妻鑑によると嘉禄3年（1227）に亡くなったとされています。

2代 ただとき 忠時

嘉禄3年（1227）に忠久から家督を譲り受け2代守護職となりました。忠時も忠久と同様に鎌倉に住み、有力御家人として幕府に仕えました。承久3年（1221）の承久の乱では北条泰時ほうじょうやすとき側につき、後鳥羽上皇ごとうぼじょうこうの軍と宇治川で戦い軍功を挙げました。

3代 ^{ひさつね}久経

文永2年(1265)に父忠時から家督を相続しました。文永11年(1274)に起った文永の役(元の来襲)により、^{いこくけいごばん}異国警固番として初めて九州に下向



しました。2度目の元の襲来である弘安の役(1281年)では、一族や薩摩の御家人を率いて戦いました。この戦いの後も博多の筥崎に留まり、弘安7年(1284)にこの地で亡くなりました。

※図「蒙古襲来絵詞」より島津軍(旗に十の字が見える。)

4代 ^{ただむね}忠宗

3代久経の子で、父とともに元寇の役で活躍しました。久経が亡くなってからは、異国警固番を弟の伊作久長に任せ、領国薩摩国の経営に専念しました。

和歌をたしなみ、新後撰和歌集に「浪こゆる袖の湊のうきまくらうきてそひとりねはなかれける」など2首が掲載されています。

※新後撰和歌集は正安3年(1301年)に、後宇多天皇の命により編纂された13番の勅撰和歌集。

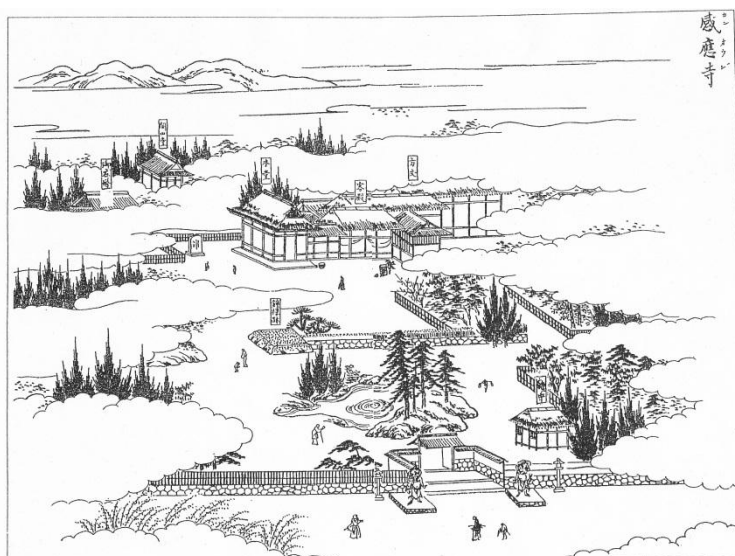
5代 ^{さだひさ}貞久

文保2年(1318)に父忠宗から家督を相続しました。貞久の頃は鎌倉時代の末期で討幕の動きが盛んになると、足利尊氏の誘いを受け討幕に貢献し、恩賞により、日向・大隅の守護職を得、初代忠久以来の薩隅日の三州守護職に復帰しました。

その後、尊氏が後醍醐天皇(南朝)と対立すると貞久は尊氏側(北朝)につき、南朝についた豪族達と争い領内の平定にあたりました。貞治2年(1363)に嫡男^{もろひさ}師久に薩摩国守護職や地頭職を譲り、^{うじひさ}氏久に大隅国の守護職を譲り95歳でなくなりました。

1 感応寺

感応寺創建の由来は元禄 11 年 (1698) に感応寺 24 世物外崇享和尚が寺社奉行所に提出した文書よると島津家初代忠久により島津家菩提寺として建久 5 年 (1194) に日本臨済宗の開祖である栄西禅師を開山師として創建されました。



島津家 5 代貞久は元享 3 年 (1323) に肥前 (佐賀県) の高城寺から雲山和尚を招いて寺の再興を図り寺は栄えました。その後、嘉吉 2 年 (1442) に大火により本堂及び本尊千手観音像が焼失しましたが、島津 9 代忠国や島津一門の寄進により再建されました。しかし、その後も火災による消失や豊臣秀吉による薩州島津家※の改易などにより寺領は減少しました。江戸時代に入っても藩の財政の立て直しなどにより末寺も極楽寺、永林寺、楞嚴寺、長寿寺、大蔵庵の 5 カ寺に減少しました。

また明治 2 年 (1869) の廃仏毀釈により廃寺となりましたが、野田の住民の手により貴重な仏像、文書等を密かに隠し守り現在に伝えています。

※薩州島津家：忠国の弟である用久が阿久根、野田、高尾野の諸城を収めて薩州家と名乗り、以来 7 代、140 年間出水の地を治めました。

感応寺所蔵の文化財

(1) 十一面千手観音・脇立四天王像

建久 5 年 (1194 年) に創建された感応寺の本尊です。廃仏毀釈の際に多くの仏が破壊されましたが、当時の人々によって大切に守られました。平成元年に国宝修理所京都美術院で修理が行なわれた際、文安 2



年 (1445 年) に定朝三派 (慶派、院派、円派) の院派の仏師院隆によって作成されたことが判明しました。(昭和 36 年 6 月 17 日県指定文化財)

けんぼんちやくしよく
(2) 絹本著色雲山和尚像

雲山和尚は島津貞久(5代)の命を請けて感応寺の復興にあたった中興開山で、讃文中には、足利尊氏が和尚を称えた「さぞなげに都の遠き山の端に曇らぬ月のひとりすむらむ」の和歌も書かれている。10代徹堂和尚の時代に作られたものであり、県内最古の頂相(禅僧の肖像画)です。(昭和56年3月27日県指定文化財)



ごびょうしゃ
(3) 感応寺五廟社

五廟社とは、島津初代から5代までの墓のことで、初代から4代までは鎌倉時代、5代は南北朝時代初期に建立された。島津家26代^{なりのぶ}齊宣が石塔に廟堂を建立しましたが、現在は残っていません。廃仏毀釈の時、法名を神名に変え、明治8年に現在の形となりました。明治13年に感応寺復興以後、寺で管理しています。寺では毎年7月17日に六月灯を執り行い、島津5代の慰霊を行っています。



(昭和61年4月1日市指定文化財)

(4) 感応寺の仁王像

感応寺第28代直応和尚の時、堀兵左エ門の寄贈で、寛延4年(1751年)に建立されました。石像の密迹金剛力士像(右を羅延金剛ともいう)仁王は仏教を守る神としてインドの16大王に形どった金剛力士で寺の門に建てられています。後背に熊野権現とあるのは、廃仏毀釈の法難を避けようとする偽装ではないかと言われています。



(昭和61年4月1日市指定文化財)

(5) 感応寺のソテツ

このソテツは、永禄 10 年（1597 年）に感応寺第 18 代茂林和尚が阿久根の楞嚴寺に隠居中、薩州島津家 6 代義虎の文船使者として琉球に赴いた際、帰りに中山王から贈られたもので、葉の付け根の切除跡から推測しても 400 年前後の樹齢と考えられ、歴史的背景もあり、植物学的観点から考察しても価値の高いものです。

（平成 13 年 7 月 10 日市指定文化財）



2 俊寛しゅんかん僧都菩提碑

平家物語によると、俊寛は、平清盛の専横を憎み、平家を滅ぼそうと陰謀を企てましたが発覚し、同士の藤原成経、平判官康頼とともに硫黄島へ配流されました。その後藤原成経、平判官康頼は許され京に帰りましたが、俊寛は重罪として独り島に残されました。伝説によると、その後俊寛は救われて密かに島を脱出しましたが、舟中で病になり、荒崎で舟を降り、山内寺で隠棲中に死亡し、ここに葬られたと伝えられています。墓は元、土塚であったものを野田の住人吉富十郎左衛門が 500 年忌にあたる延宝五年（1677 年）に石碑を建てて祀ったものです。（昭和 61 年 4 月 1 日市指定文化財）



3 中郡の田の神

「タノカンサマ」と親しまれる田ノ神は、旧薩摩領に 2 千体以上あると言われ、新田開発の記念や風水害・旱魃の除災招福のために、建立されました。この田ノ神は江戸時代に建立され、右手に「飯げ」左手に「椀」を持っています。（昭和 61 年 4 月 1 日市指定文化財）



4 若宮神社 (龍尾神社)

明治時代以前は若宮神社と言われていましたが、現在は龍尾神社となっています。

祭神はいざなぎの命と島津忠久公です。昔は西側の丘の上にありましたが、昭和44年に現在の場所に移されました。この周辺は木牟礼城の屋敷跡とされ、「御屋地」と呼ばれており、現在も屋地が地名として残っています。

寛政2年(1790)に島津家26代^{なりのぶ}斉宣によって再建されたおり、上野寛永寺の法親王に依頼し作成した「若宮大明神」の社額や4体の鬼面も残っています。

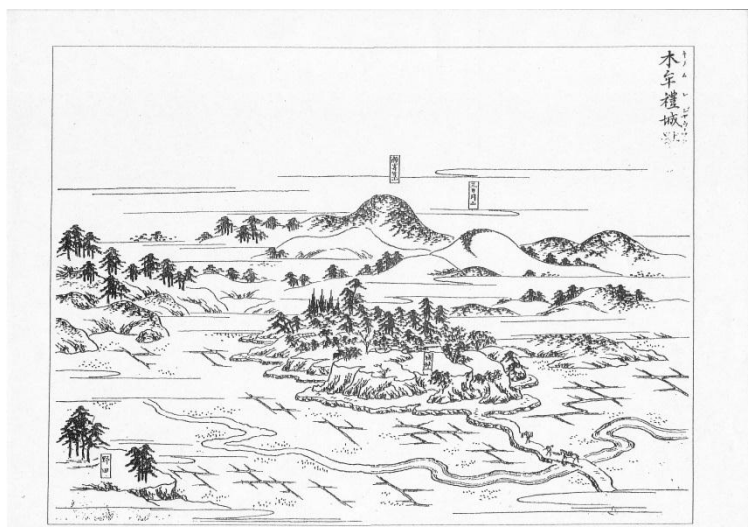


5 木牟礼城跡

鹿児島県地理纂考によると、木牟礼城は島津忠久が薩隅日の地頭職に任命された後、国の運営を行うための守護所として建久年間頃(1190～1198)家臣の本田親恒^{ちかつね}に命じて築かれたとされています。

5代貞久の時、日本の政治は南朝(後醍醐天皇)と北朝(足利尊氏)に分かれ各地で対立が始まり、貞久は北朝側についていましたが、出水の在地領主である伴姓肝付氏一族の和泉氏は南朝の有力な勢力であり、木牟礼城や尾崎城を舞台に1354年から1355年にかけて戦いが行われました。

その後、南北朝の混乱が収まると総州家(師久^{もろひさ}:貞久の子で薩摩国の守護とした)と奥州家(氏久:師久の弟で大隅国の守護職とした)の間で対立が起り、応永29年(1420)に奥州家の久豊^{ひさとよ}が総州家の守久^{もりひさ}が立て籠もる木牟礼城を攻め守久は肥前へ逃亡し、城は廃城となりました。



6 中郡遺跡群（屋地館跡）

中郡遺跡群は、島津氏初代、忠久の居館跡とも言われる「木牟礼城館跡」を含むもので、これまでに、この居館と関連すると思われる建物跡や中国から輸入された青磁・白磁などが、出土しています。

また、「屋地館跡略図」でその存在が推定されていました堀跡の発見をはじめ、館跡を考古資料の側から裏付ける重要な遺構、遺物が出土しています。



特筆すべき出土遺物に龍首水柱りゅうしゅすいぢゆうがあり、注ぎ口の部分に龍の首を模した装飾を持つことからこのように呼ばれています。この焼き物は13世紀から14世紀頃に中国の景德鎮窯けいとくちんがまで作られた青白磁で、当時から高価な品であり、注ぎ口部分のみの出土ですが、神奈川県の鎌倉、和歌山県、宮崎県で出土している以外はなく非常にめずらしいものです。

7 山内寺跡

感応寺に残されている天保12（1841）年に書かれた「山内寺由緒帳」と三国名勝図絵によれば、寺名は西光寺で山内寺は通称であり、性空上人しょうくうしょうにんにより開かれた天台宗のお寺で南九州の本山であったと伝えられています。



性空上人は延喜4（904）年に京都で生まれ、寛弘4（1007）年に亡くなっていますので、山内寺は、今から約1000年前に創建されたと推定されます。

境内の広さは3町（3ヘクタール）余りあり、島津氏が入国に際し、この寺を祈願寺として知行8町歩を与え、壮大な御堂を持つお寺となりましたが、薩州島津家第7代島津忠辰しまづただときが祈願寺を成願寺（現在の八坊付近）に移したために寺は衰退し、また、江戸時代の火災で貴重な記録や仏像、本殿が焼失してしまい、明治時代になり、廃仏毀釈で廃寺となりました。